

若者支援、いまむかし～無関心社会の罪・漂流する子どもたち

佐々木絵美

一般社団法人JOY

【背景】

2021年に生理の貧困がニュースになった事をきっかけに、一般社団法人JOYでは先行支援として、生理用品の無料配布を入り口に困っている人達の支援やサポートをしている。公共施設や学校等に生理用品の設置をする事で、気軽に相談できる環境を作りLINEやSNSでのリアルな相談に繋げている。従来の相談は、対面がメインであり名前や性別、年齢等事細かに最初から言わなければならない。子ども達は相談したくても相談した事が、他人に知られてしまうのではないかと学校や保護者に連絡がいくのではないかと悩み相談が出来ないのが現実です。

【目的】

最初の相談を子ども達がしやすくする為に私達は、SNS等に分かりやすく写真を載せている。そうする事でこの人なら相談しても大丈夫かもしれない。と思ってもらえる事ができます。

【方法】

生理用品が何らかの理由で手に入らない子ども達は、その他の問題が背景に隠れている。例えばネグレクトやひとり親家庭。高校生になると保護者に働いて自活するように促される。高校生が働きながら学校に行くとなると、稼げる金額は少なく、毎日のご飯もまともに食べられない子ども達がいる。辛い心の隙間をインターネットの中で埋めようとしたり、会った事もない優しくしてくれる大人について行ってしまう傾向がある。

【結果】

実際に生理用品をトイレに設置している中学校の養護教諭が年度末に子ども達に対してアンケートを取ったところ、設置の生理用品を使った理由で、「家で準備できないとき」が2年前は全校で6人だったのが、今回は3年生だけで11人に増えていた。学校でのアンケートで答えられない子ども達が居ることを想定すると、もう少し困っている子が多いだろう。学校に来ている子どもでも家庭では生理用品の使い方の説明がされなかったり、生理がくる事自体を汚らしいと言われ話をする事が出来ない子もいる。若者はどんなに困っていても、困り事の相談としてリアルに知っている人に助けを求める事が難しい。SNSの中で「学校に行きたくない」「親に怒られた」「家出をしたい、死にたい」など、悩みを書く事が多い。多くの加害者はSNSなどの交流で信頼を獲得してから犯行におよんでいる。親切的なふりをして悩みを聞き、相談に乗って信頼を得るパターンが多いのだ。

【考察】

函館では、事前に子ども達と関わる場所や団体と連携している。連携していると、様々な角度から子ども達の困り事が見えてくる。そして支援できる幅が広がる。年齢的に幼い子どもになればなるほど知識に乏しく、被害にあった後も自分は被害者であると気づかない事が多い。また相手を信頼していればいるほど、理解者である大切な存在を失うことを恐れ、言いなりになってしまいがちだ。子どもだけでは真に親切な人と真意を隠して近づいてくる悪い大人の違いを見抜くことは難しいだろう。

【結語】

子ども達を守る為にも、今子ども達は何を求めて、何でコミュニケーションを取っているのか、私達大人がアップデートする必要がある。